

2022年、年賀状あれこれ

上原 昇 (2組)

今年の正月もコロナ・オミクロン株の感染拡大とともにあっという間に半月経ってしまいました。16日には恒例の年賀状のお年玉抽選が行われ、受け取った賀状と当選番号と照合しました。3等(切手シート)が当たる確率は3%ですから、手元の240通からは確率よりちょっと少ない6枚が当たっていました。

年賀状が発売開始されたのが昭和24(1949)年ですから我々の年齢とほぼ同じ歴史があり、発行枚数のピークは平成15(2003)年の44億枚とのこと。それがメール・SNSの普及や若者世代での住所非公開などにより、年々減少を続けています。

令和4年用の年賀はがき発行は18億枚(国民一人当たり14.5枚)、対前年で94%、ピーク時の半分以下になってしまいました。

年賀状のやりとりは日本人の培ってきた良い風習だと思うのですが、これからどうなるのか、気になるところです。

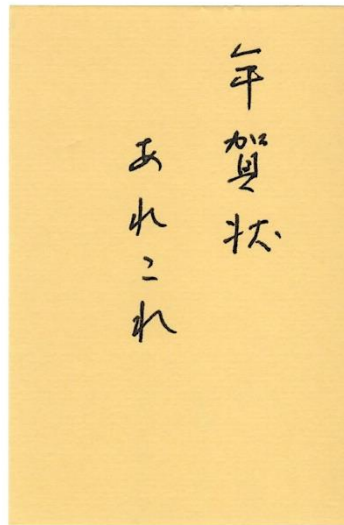
今年の年賀状のやりとりで思うことをいくつか。

- ◆「賀状については今年を限りとします」という人が年々増えてきました。
何となく寂しい思いにかられますが、お互い齢を重ねているということでしょう。
筆者が受け取った賀状の中で最年長は93歳になる従姉でした。
- ◆いつも賀状が来る人から届かなくなると、何かあったかなと心配になります。
面倒になったからというだけなら良いのですが、病気や怪我で賀状が出せなくなったということもあるので要注意です。
- ◆長らく体調を崩していて、ここ何年か顔を見ていない同期のM君からは「今年は会いたいものです」という文面の賀状が届きました。回復していたら、コロナが収まったところで久しぶりに会いたいものだと思います。
- ◆発信人名の無い賀状が2通ありました。後で書くつもりが忘れたのでしょうか。1通はあて名書きが自筆なので、昨年の賀状ファイルから筆跡を調べてみたりしましたが、特定できませんでした。もう1通は郵便番号の記載があってすぐに分かりました。年明け、たまたまメールのやりとりをしていた同期のN君のところにも名前のない年賀状が届いたという話があり、誰かすぐに分かった(筆者も知っている人)と聞き思わず笑ってしまいました。
- ◆昔は手づくり木版画を印刷した賀状が多かったものですが、最近では写真付きの賀状が当たり前になってきました。お孫さんの写真を入れたりした微笑ましい賀状を毎年受け取ると、その人の家族の変遷がよく分かり見ていて楽しいものです。
(次ページに2022年お年玉切手シートと年賀状)



郵便はがき

--	--	--	--	--	--



(2022年1月17日記)

以上